**第59回　三重民教連初冬の集会**　　　2014年12月6日

**【保護者とつながる学級づくり】分科会　まとめ**

　この分科会では、講演をされた大日方先生と退職教員2名、一般2名の計５名が参加しました。現職の先生が1名もいなかったので、今の学校現場での生々しい話は出ませんでしたが、いなべ地域の様子、四日市での話、愛知の私立高校の生徒・教師・親を含めた運動の話、不登校現場での話など様々な事例が出されました。学年や学級単位ではなく部落単位で懇談会を持ったことで見えてきたことや深まったつながりの例、子どもが高校を卒業しても運動に関わり続ける愛知の保護者たちの例、不登校・ひきこもりの家族会での母親を孤立させないためにサポートする例など、興味深い話がいろいろと出されました。教師にしても、生徒にしても、親にしても、孤立すれば様々な問題が出てきますが、つながっていく中で課題を解決していく糸口が見えてきたり、成長のきっかけになったりする、という話が、それぞれが経験してきた事例も出しながら話し合われました。

【感想】

・保護者とのつながりを大切にすることは、今更ながら必要だと思いました。そのためには、保護者が話しやすい環境や、つながりやすい環境を作り出す工夫が大切だと思います。今学校は、忙しさに明け暮れているところが多いように思いますが、今一度、子どもを目の前にすえて、どう取り組んでいくことが一番必要なのか、職場として（個人だけではなく）考えていく必要があると思いました。

・「つながる」ということが状況を改善する突破口になるということは良くわかりました。ただ、その一方で、学校や地域、社会において「つながりにくい環境」がどんどん拡大しています。楽しいことには参加するし、スタッフとしても協力するが、主要スタッフとして計画やイベントを立案し、中心になって皆を引っ張る人が、本当の意味で育ってないと思います。その辺も含めて、どう「つながる」かの工夫が必要だと思います。

・自分が関わる愛知の私学運動を頭の片隅に置きながら講演を聞き、分科会に参加しました。「学力向上」が政治問題として扱われ、学校や教師のまともな実践を阻害する働きをしている中で、保護者（を含めた国民）とどうやってまともな教育的合意を明らかにし、運動化しないと、結局ツケを払わされるのは国民自身だと思います。一歩ずつ後ずさりしているような教育運動の活路を見つける研究集会を期待します。